COLUMN

# 最後の一滴まで飲み干せるか



桜美林大学リベラルアーツ学群教授
藤倉まなみ
FUJIKURA Manami

1985年京都大学大学院工学研究科修了、2013年北海道大学大学院工学研究科博士課程修了、博士(工学)。1985年環境庁入庁、2005年環境省大臣官房総務課環境情報室室長、2007年慶應義塾大学環境情報学部教授、2010年桜美林大学リベラルアーツ学群(環境学専攻) 教授、現在に至る。科学技術・学術審議会専門委員、東京都環境影響評価審議会委員、神奈川県環境審議会委員、横浜市廃棄物減量化・資源化等推進審議会委員、公益社団法人におい・かおり環境協会理事など。専門は環境システム科学、環境政策。

大学で学生とごみの組成調査を行うと、リサイクル用に分別廃棄されたペットボトルに飲料が少量残っているものをよく目にする。飲み残しは、蓋が閉められていないとごみ箱内の他の飲料容器等を汚し、環境面・衛生面の問題を大きくするし、蓋が閉められていても夏期には腐敗し破裂するおそれがある。もちろん、飲み残しは資源の浪費である上、運搬・廃棄時の環境負荷を増大させ、作業環境を悪化させるなどの問題点がある。

そこで、500mLの廃ペットボトルを対象として学内で約660本を調査したところ、23%に飲み残しがあった。飲み残しがある場合の平均は56g/本で、飲み残しがないものを含む総本数あたりの平均は13g/本であった。これは空容器の重量の47%に相当するので、そのまま運搬すると飲み残しにより重量が1.5倍近く増加していることになる。ペットボトルリサイクル推進協議会によれば、2013年度の回収率は重量比で91.4%であるが、もし飲み残しが含まれていればボトルの実回収率はこれより低いことになる。

また、飲み残しには非意図的なものと意図的なものがあることがわかった。非意図的な飲み残しとは、ペットボトルから直接飲料を飲むときに、首を後ろにそらさないで飲むため、本人は飲みきったつもりだがボトル内に少量残っているものである。複数の種類・形状のペットボトルで首がそらないようにして実測調査したところ、平均5g、最大9gが残った。このような非意図的な飲み残しは廃ペットボトル全体の13%に見られた。首をそらして最後の一滴まで飲み干せば無くすことができるものである。

一方、意図的な飲み残しは、満腹、荷物になる、まずいなどの理由で行われていた。飲みきれるサイズの飲料を買う、荷物になるからといって安易に廃棄しないなどの基本的な啓発が必要である。

ところで筆者は国や自治体などの会議に委員として参加することがある。多くの場合何か飲み物が提供されるが、近年は喫茶店の出前や事務局で煎れたお茶が減ってボトル飲料が出される場合が多い。500mLの輸入物のミネラルウォーター、しかもプラスチックコップまで付けて出されると、環境負荷の多さにがっかりする。各人にボトル飲料を出すならコップ類はごみを増やすだけで全く不要であるし、量が多いと飲み残して会議室に置いていく委員もいる。使い捨てのボトル飲料を出さないのが一番である（英国では、環境対策のため、国の会議や行事においてペットボトル飲料の公費調達が廃止されていると聞いている）が、どうしてもボトル飲料を出すなら、コップは配らず、少なめのサイズで、委員には最後の一滴まで飲み干してもらい、中身が余ったら持ち帰らせるべきだ。ついでに地元産のお茶など地産地消だとなおよい。